

荒 松 雄著

インド史におけるイスラム聖廟

——宗教権威と支配権力——

月 輪 時 房

1

本書は、日本におけるインド史研究の指導的立場にあり、インド中世史研究の第一人者でもある著者が、長年にわたって精力的に進めてきた中世史研究の、広範な成果の一端を世に問うものであり、従来、日本ではとく等閑視される傾向にあった、インド中世研究の分野における金字塔をなすものである。

本書の最大の特色は、一言で云えば、インド中世のスーフィーおよびスーフイズムの研究、とくに、スーフイーのもつ宗教権威と、ムスリム支配権力との関係を説明するために、従来、ほとんど利用されることのなかった遺跡・建造物——スーフイー聖者の墓やダルガー（墓廟）、スーフイー関係宗教施設など——を資料として活用した点にあるといっているであろう。著者は、こうした方法により、文献資料に基づく従来の諸研究の結果にさまざまな問題提起を行い、その少なからぬ部分について変更をせまる新たな成果を収めることが

できたのである。このような点からいって、本書は、まさに、その研究方法および視点において、これまで未開拓であった新分野を切り拓くものであり、その業績に対しては、昭和五十三年に、日本学士院賞が授与されている。

本書の著者は、一九五〇年代前半のインド留学において、すでに、デリー地域に残存する中世遺跡の探査と写真撮影を行っている。また、一九五九—六二年の東京大学インド史調査団の現地調査に際しても、こうした遺跡について、さらに精緻な観察と記録とを実施したのである。そして、その後の調査資料の整理・研究、新たな現地調査での作業を含めれば、デリー・現存のイスラム遺跡・建造物に対する著者の取り組みは、優に二十年を越えている。このような過程のなかで、著者は、デリー遺跡について、その分析の技術的方法と、構造・様式に関する知見とを体得したのであった。

他方、著者は、中世インドのイスラム思想や宗教集団の活動、とくにスーフイーの思想と宗教的実践に関する研究の分野では、南アジアの研究者、とくにアリーガル大学のモハンマド・ハビブ、K・A・リザーミー両氏などと、積極的に交流を重ねたが、その過程で、著者は、彼等が利用してきた宗教文献には、さまざまな限界がみられること、そして彼等の研究には、重要な研究分野と方法、つまり、スーフイーの墓・ダルガーその他のスーフイー関係諸施設を研究資料とし

て活用する分野と方法とが欠如していることなどに気付いたのであった。

こうして、著書は、文献史料に基づく従来の研究に批判的見解を抱くとともに、自らの中心テーマである宗教権威と支配権力との関係の解明にとって、イスラム建造物の研究がきわめて有用な役割を果たし得ることを確信するようになる。この間、一九七一・七三年に実施された東京外国語大学を中心とする現地調査に参加した著者は、デリーをはじめとする、インド・パキスタンの各地において、残存する聖者の墓・ダルガーその他のさまざまな宗教施設を歴訪し、当該研究資料の蒐集に一層の努力をかたむけたのであった。

本書は、こうした資料のうち、もっぱら、サルタナット期およびムガル期における、首都デリーの遺跡・建造物を中心資料として利用することによって、著者自身のテーマを追求したものである。

著者の留学やその後の数次にわたる現地調査において、丹念に蒐集された資料が、ふんだんに盛り込まれており、従って、議論の展開は、きわめて実証的かつ説得的である。

なお、本書については、すでに、小名康之・前田専学両氏の書評が公にされている(註)。

(註) 小名康之氏(青山史学五、一九七八年三月。一〇七一―一二六ページ)。前田専学氏(宗教研究五二―一。一九

七八年六月。九五―九九ページ)

2

本書は、本文六七ページ、四部構成の大著であるが、その全体は

- (1) 予備的考察(第一部)
 - (2) 研究資料の検討・紹介(第二部および第三部)
 - (3) 歴史的諸問題の研究(第四部)
- の三部分に分けられる。

まず第一の予備的考察は、第一部「歴史的背景と課題・方法」と題され、三つの章から構成される。

第一章「イスラムの浸透とスーフィーの活動」では、サルタナット時代およびムガル時代におけるムスリム支配の成立と展開の過程が概観され、こうした政治的背景のなかで、ムスリム人口が次第に増加していく事実が述べられる。また、こうしたムスリム人口増に与って力あったのは、ムスリム支配者の改宗努力ではなくて、スーフィー聖者や遊行の宗教者たちの、一般民衆に与える道徳的ないは社会心理的な影響であったこと、スーフィーの思想と実践は、スンニー正統派教学者や、正統派に立つムスリム支配層などと、必ずしも対立するものではなかったことなどが指摘される。さらに、この第一章では、当時、めざましい活動を行っていた、いくつ

かのスーフィー・イスラ（派）について説明され、スーフィーの生活と実践の拠点としてのハーンカー（修道場）やジャマー・アト・ハーナ（集会所）、スーフィーの死後の安息所となるダルガー（墓廟）などがあわせ解説される。

第二章「首都デリーの変遷と建造物の造営」では、まず、サルタナット・ムガル両時代における首都デリーの歴史の変遷がたどられ、ついで、この地域に現存する城砦と、同時代文献に名を記された同地域の都市とについて説明される。また、両時代において造営された建造物について、その種類——城砦・宮廷建造物・モスク・墓・墓地・墓建築・その他の宗教施設および水利施設など——と、それぞれの形態・特徴とについて略述される。

第三章「課題と方法」では、まず、イスラム学や歴史学の分野において、スーフィーとスーフィズムの研究が、従来、どのような位置づけのもとになされてきたかについて述べられ、自らがムスリムまたはムスリム社会出身者であるインド人研究者によって主に進められてきた、近年における南アジアのスーフィー・スーフィズム研究が、どのような一般的傾向と問題点とをもっているかが説明される。ついで、スーフィー・スーフィズム研究の基礎資料とされてきた同時代の宗教文献について解説され、あわせて、遺跡・建造物に関する十九・二十世紀の主な研究書と報告書とが紹介される。そし

て、本書において、主要な研究資料として新たに利用されることになる建造物について、その歴史資料としての価値をめぐる著者自身の見解が明確に披瀝される。

この第三章では、さらにつづけて、スーフィー聖者が、自らの修道拠点たるハーンカーをおき、ムスリム・非ムスリムとも接触して、宗教権威を確立し、広範な影響力を行使するに至ること、これに対して、一方、支配権力は、体制の維持・温存という世俗的利害と、スーフィーに対する個人的傾倒・崇敬の心情とがからみ合った複雑な対応を示すことなどが述べられる。また、聖者の宗教権威は死後においても存続し、聖者のダルガーには、近親者や弟子のほか、権力者・支配層によって墓がつくられ、宗教施設が寄進されるという注目すべき歴史的事実が報告される。つまり、著者の見解によれば、こうした墓の主人公や、建造物の造営主体を明確にすることによって、宗教権威と支配権力との間の関係を明らかにすることができるのであり、こうしたことが、本書の採用する方法論を成立せしめる根拠となるのである。第三章では、最後に、インド史における聖者崇拜の問題点がとり上げられ、イスラムにおける聖者崇拜と、インド古来の諸宗教にみられる聖者崇拜——とくにヒンドゥーイズムのバクティ信仰にあらわれた神秘主義思想——との関連が考察され、イスラムの聖者崇拜・墓崇拜をとりまくインド的諸条件について検

討が加えられる。

以上が、第一部「歴史的背景と課題・方法」の概要である。これは、第二部以下で展開される議論の背景となることから、第二部以下の行き届いた説明であるが、その要点は、著者が、南アジアにおけるスーフィー・スーフィズム研究の現状を的確に分析し、これにするどい批判を加え、かつこれと関連させつつ、自らの研究上の立場、視点と方法などを明確に述べることによって、本書の性格と特徴とを浮き彫りにすることにあるように思われる。

すなわち著者によれば、ムスリムたるインド人研究者による近年の研究には、自らのムスリムとしての理念や見地が反映しており、また、基礎資料たる「宗教文献の叙述内容にややもすれば引きずられがち」(五六ページ)な傾向がみられるという。そして、この宗教文献——「マルフーズ」(聖者記録)、「タズキラ」(聖者伝)など——も、しばしば、聖者またはその関係者に対する「讃辞や称揚の言葉の羅列」(六一ページ)に終わったり、「意図的な誇張や歪曲」(同ページ)を含む場合がみられ、「果たしてそれが事実であったかどうか疑わせるような叙述も少くない」(同ページ)という。

これに対して、本書が基礎資料とするところの遺跡・建造物は、著者によれば、「それが造営され、あるいは補修・増改築された時代の条件や状況をそのまま示唆するという点に

おいて、歴史学の上では第一等の資料的価値を持ち得る性質のものである」(六七ページ)とされる。そして、こうした著者の認識と立場こそが、本書の第二部以降に展開される、著者独自の方法論を支えているのである。

著者は、さらに、第二部以降で実施する作業内容について、「ダルガー内における墓や建造物の状況を一々検討することによって、サルタナットおよびムガル体制下の権力者・支配層とダルガーとの結びつきを明らかにして、支配権力と宗教権威との関連を考察する」(七五ページ)ことと説明しており、また、こうした作業を可能ならしめる根拠として、当時のつぎのような歴史的状況、即ち、スーフィー聖者の権威が確立され、死後においても存続・高揚される過程で、時の権力者・支配層により、聖者のハーンカーあるいはダルガーに、彼ら自身の墓がつくられ、さまざまの宗教施設が寄進されるという歴史的状況が存在した事実が指摘されているのである。

なお、この第一部には、随処に詳細な註が付されており、研究者にとって便利であるばかりでなく、研究初心者にも手引き書として十分利用し得るものとなっている。

3

以上の第一部につづく、第二部「デリーに現存する三大ダ

ルガー」と、第三部「デリーに残存する中小ダルガー」は、本書の基礎的研究資料となる遺跡・建造物の検討・紹介を行うものである。

まず、第二部では、デリーに現存する三つの大規模ダルガー、すなわち、サルタナット初期および中期に活躍した三人のチシュティー派の著名な聖者、シェイフ・クトゥブ・ディーン・ルッパフ・ティヤール・ルッカーキー、シェイフ・リズ・ザーム・ムッディーン・オリーヤーおよびシェイフ・リナス・スィール・ディーン・ムフムードのダルガーがとりあげられる。

まず、各々の聖者の生涯や、彼らと当時のスルターンとの関係などが、同時代史書や宗教文献の記載により紹介されたあと、三つのダルガーのそれぞれについて、当該聖者の墓を手始めに、ダルガーの内域と周辺・近傍に現存する多数の墓および建造物が、一つ一つ精査され、各種資料に基づいて詳細に検討される。

こうした作業においては、著者自身による現地調査の成果が基礎となることはいうまでもない。著者は、遺跡・建造物を直接現地を訪ね、その現状を詳しく観察し、現存する碑文・墓碑銘の内容を確かめ、構築物の構造・様式を細かに検討する。これとともに、ダルガー関係者の証言や、現地に伝わる伝承などもあわせ蒐集する。また、それらが所在する土地の地理的・社会的環境などについても十分な注意を払うの

である。

デリーにおける遺跡・建造物の調査・研究は、十九世紀半ばから二十世紀始めにかけて、アフマド・ハーン、カーン・ステイーヴン、バシル・ルッディーン・アフマドあるいはインド政府考古調査局などによって行われ、それぞれ特色ある報告書が公にされているのであるが、本書の著者は、こうした先人の業績をも十分に活用する。

また、サルタナットおよびムガル時代に属する史書あるいは宗教文献などに記される関連部分も、注意深く参照されるのは勿論である。

こうして、著者は、利用し得るかぎりのあらゆる資料を駆使することによって、墓・建造物の一つ一つについて、多角的検討を行うのである。そして、墓・建造物のそれぞれについて、建設者、創建の時期、創建時の状況、補修・改変などによる後代の変遷過程、さらに墓・墓建築にあつては被葬者名、などなどのことがらが解明される。

以上のような墓・建造物の個別的検討につづいて、次の段階としては、各ダルガーごとに、その内域と周辺・近傍に所在する墓・建造物が、それぞれの造営年代に従って、時期別グループに分類される。こうして、各ダルガーのそれぞれの時期における様相は、右のような墓・建造物を手がかりとして複元構成されるのであり、これによって、各ダルガーの歴

史的変遷・消長の過程が跡づけられるのである。

このような一連の作業によって得られた成果を、いまここで詳細に紹介することは、紙幅の関係から差し控えたい。しかし、いずれにせよ、スルターン・皇帝をはじめとする支配層が、それぞれのダルガーに、どのような時期に、どのような度合と範囲で関わり合ったかが、彼等による墓の造営、建造物の寄進や増・改築などの事実を通して、具体的かつ実証的に跡づけられるのである。こうして、宗教権威と支配権力との関係を解明するための絶好の資料が用意されたのであった。

第三部「デリーに残存する中小ダルガー」は、サルタナット・ムガル両時代にデリーで活躍した、上記三人を除くその他のスーフィー聖者とその関係者たちの墓やダルガーが、合計四六例とり扱われている。これらは小さきまであるが、いずれにせよ、右にくわしく紹介された三大ダルガーにくらべれば、規模ははるかに小さい。ここにおいても、ダルガーに現存する墓や付属施設の一つ一つが丹念に調査・検討されているが、その方法は、第二部の場合と同様であるので、ここでくわしく立ち入ることはしない。

以上が、第二部および第三部の概要である。個々の墓および建造物の細部にわたる考察・検討の基礎となったものが、著者自身の現地調査の成果であったことについては前に述べ

たが、第二部および第三部で著者が扱った墓ないしダルガーは、実に、東西約十キロ、南北約二十キロメートルの広範囲に分布しており、しかも、これら遺跡は、近年の政治的・社会的変動や、最近とみに顕著となった急激な都市化現象などによって影響を受けているので、その調査にはさまざまな困難が伴うのである。そうした困難を克服しつつ調査を実施した著者の努力に敬意を表さなければならぬ。

著者はまた、この遺跡調査の過程で、付随的成果として、今日におけるムスリムの生きた信仰生活や、宗教活動の実態にもふれることができたのであるが、こうした体験が、第二部および第三部の本文や註の随処に生き生きと報告されていて、とかく羅列的で無味乾燥なものになりがちな、研究資料の検討・紹介部分に、潤いを添えている。

さて、本書が基礎資料とするところの遺跡・建造物が「歴史学の上で第一等の資料的価値を持ち得る」ためには、その創建や、後代に加えられた補修、増・改築などについて、それぞれ年代が明確となることが必須の条件であることは勿論である。そしてその他にも、その時々状況や、それらのことがらに関わった人物などについて、確かな情報を得られていることが望ましい。こうした場合、創建など、右のようなことがらが起った時点で製作された碑文・墓誌銘はもっとも確かな資料となるし、史書または宗教文献の記載が

同等の価値を持ち得る場合もある。しかし、こうした好条件に恵まれた対象遺跡は数少ない。

そこで、本書の著者は、しばしば、建造物の構造・様式を年代比定の手がかりとする。幸い、デリーにおいては、右のような好条件を備えた建造物の構造・様式の分析・比較を基にして、構造・様式の各時期における一般の特徴を素描し、その変遷過程を跡づけることは、かなりの程度可能なのである。従つて、著者が用いた方法は、編年のための有効な手段であると思う。しかも、著者は、この場合、サルタナット時代を初・中・末の三時期に分ち——ときに中期をさらに前・後の二つに再区分することもあるが——、ムガル時代を二期または三期に区分するにとどめており、これ以上の細分化によつて生じる無理を賢明にも避けておられる。

しかし、本書では、右に述べた諸手続きによつて処理されることなく、結局、後代——その多くは近代であると思われる——の碑文、もしくはそこに伝わる伝承に頼らざるを得なかった対象遺跡も、少なからずみられるのである。対象遺跡を歴史学の資料として活用するための事前の処理過程において、伝承あるいは後代の碑文が、どこまで有効性をもち得るかの判断は、難かしい問題を孕んでいるように思う。

なぜなら、伝承は、それ自体、しばしば、「消滅し、変えられ、逆に新しく創り出されるといったことも認められる」

(五九六ページ)ものであるからであり、また、後代の碑文——そのあるものは、伝承に基づいて近代に記録されたと考えられる——も、一度ならず書き改められ、その際に内容面でも何らかの改変が加えられる可能性は、常に否定できないからである。そして、現に、本書の第四部第五章は、右のような事態が、ごく最近において、事実、起つていたことを著者自身が確認した、伝承や後代碑文の実例を報告しているのである。

しかし、問題を孕むからといって、これらを利用しないのはかえつて安易に過ぎよう。これらが真実を伝えている可能性をもつ限り、活用の方途をさぐるべきであらう。現存の伝承や後代碑文について、その成立事情やその後の経過を明かにし得ない場合が多い今日の段階では、結局、著者が本書で行つたように、他のさまざまな資料との整合関係、明らかな事実との齟齬の有無など、あらゆる角度からの総合的な判断に立つて、一つ一つ、慎重に処理していくほかはないであろう。いずれにせよ、本書の第二部および第三部の方法論における大きなポイントの一つは、こうした伝承や後代碑文の活用方法にあるように思う。

4.

第四部「ダルガーをめぐる歴史的諸問題」は、上述の第二

部・第三部で検討・報告されたダルガー関係諸建造物を資料として、さまざまな歴史的諸問題を論じたもので、五つの章と二つの付章とからなっている。

第一章「聖者崇拜と墓崇拜」では、スーフィー聖者が、名声や崇敬に基づいて、生前に、かち得た宗教權威は、死後においても存続されること、そして、聖者への崇敬は、聖者の△墓▽に対する崇敬へと転化し、この墓への参詣・巡拝の慣習が広く行われるようになったことなどが述べられる。

第二章「ダルガーにおける墓と建造物の造営」では、聖者の墓が生前ゆかりの地に設けられると、聖者の徳性・靈力への依存の心情や、聖者のもつ宗教權威へのあやかりの願望などから、近親者・後継者・弟子・信奉者などの墓が造られるようになり、さらに、権力者・支配層とくにムガル皇帝・皇族などの墓が営まれるようになる事実が述べられる。そして、ムガル皇帝・皇族の墓が営まれる理由として、著者は、個人的心情・願望の他に、皇室経済の窮乏を背景とする、墓の造営・維持・管理に要する経費の節減と、ダルガーとの関係緊密化による、スーフィー勢力掌握の意図とを挙げる。一方、ダルガーは、こうした支配層の世系的な墓地をもつことにより、上流支配層の墓地管理者に転化するが、支配層の豊かな財力との結び付きにより、維持・運営上の経済的利益を受けただであらうというのである。

第三章「ダルガーの発展と聚落の成立」では、ダルガーのあるものが、權威の増大や著名度の高まりにつれて、ズィヤーラトガー（巡礼地）として知られるようになると、支配者や一般民衆が参詣・巡礼に訪れるようになり、やがてそこに彼等を対象とするバーザール・宿泊や娯楽のための施設が形成されるという。こうしてダルガーの発展が、聚落の成立をもたらし経過が説明される。こうした実例として、著書は、三大ダルガーの周囲に今日みられる三つの聚落——メヘローリー部落・ニザームプル部落およびチラーグレデリー部落——を挙げ、残存する遺跡・建造物を手がかりに、それぞれの成立と発展の経過を考察する。

第四章「スーフィー聖者の墓の形態・構造上の問題点」では、聖者の墓に、露天の墓のみの単純な形式と、その上を何らかの構築物が覆う墓建築とがあつて、後者では、列柱式墓建築が一般的形態であること、この形態の墓建築では、しばしば西側をミフラーブで閉ざすものの、他の柱間には、透し彫りのスクリーンがはめ込まれていることなどが説明される。そして、著者は、こうした事実から、スーフィー聖者の墓にふさわしい条件として、(1)小規模で簡素な建造物であること、(2)内部が見える墓建築であること、(3)墓石自体に近づくことができること、の三点が考慮されたであらうことを推定する。

第五章「ダルガーに関する歴史的事実と信仰の実際」では、今世紀に成立した偽廟の一例と、墓の主人公の名の改変に関わる一例とが紹介されている。そして、著者は、こうした事例からひき出される問題点として、墓・ダルガーが、その信仰者・巡礼者に対して意味をもつのは、確実な歴史的・客観的事実そのものではなくて、なんらかの伝承——歴史的には曖昧で、ときにはでたらめであっても——があればそれで十分な場合があること、聖者の人となりや事蹟が正しく認識されていなくても、後代につくられた伝承によって、墓・ダルガーは独自の権威を持つようになること、などを指摘する。

付章第一「スーフィー聖者の活動拠点の選定およびハーンカーの変遷」では、まず、チシュティ派三聖者の活動拠点を、支配層の政治拠点たる都城との位置関係や、交通路の状況などから詳しく検討し、彼等が、拠点選定にあたって、支配権力との直接の接触・交渉を拒む原則的姿勢を貫きつつも、他方、修道と宣教の面において、支配層の力を間接的に利用しようとする現実的配慮を示していたことを明らかにする。次いで、著者は、ハーンカーの変遷を、遺跡・建造物によつて、サルタナット初期からトゥグルク朝後期までたどるのであるが、この際に、ハーンカーには、トゥグルク朝前期（初代・二代スルターンの治世）に属する建造物がほとんど

みられないのに対し、同朝後期（主に三代スルターン、フィローズの治世）の建造物が一転して多数残存していることを確め、この事実は、これまで文献研究が解明してきたこととがら、すなわち、第二代スルターンの、宗教者に対する強権・抑圧の姿勢や、第三代スルターンによる宗教者の保護・援助、聖者の墓・ハーンカーの建設・改修等の諸施策の実施などと明らかに対応していることを主張する。

付章第二「建造物造営をめぐるスーフィー聖者と支配権力」では、もっぱら、シェイフニザームッディーンの場合がとりあげられる。当時のチシュティ派聖者の、支配層に対する態度については、従来、同時代史書ならびにスーフィー文献に基づいてさまざまに議論され、そこでは、要するに彼等が支配層との接触・交渉を拒み、支配権力のもとで、いかなる官職につくこともいさぎよしとせず、支配権力からの施与地も辞退した、などの姿勢が強調されてきたのである。しかし、今回、著者がニザームッディーンのスルガー内に残る諸建造物を詳細に検討してみると、この聖者が、右のような態度とは些か異なる対応を行っていたことを思わせる数々の証拠が発見されるという。著者は、こうした証拠として、彼のダルガーには、スルターンや周辺支配層にしてはじめて建設可能な大規模建造物が現存していること、スルターンに宮廷文人として仕えた人物の墓が存在すること、彼のハーン

カー自体が、当時の支配権力の居住地の近くに位置していたと考えられること、彼のダルガー近傍に、彼の生前に溺ると思われる宮廷建造物らしい遺跡が現存していること、などの事実を列挙する。そして、文献から抽出された右のようなスーフィーの態度は、単なるへたてでまえVに過ぎなかったのではないかと主張する。

以上が第四部の内容のあらましである。ここでは、本書の中心テーマであり、その副題ともなっている宗教権威と支配権力との関係の問題がとり扱われるほか、聖者崇拜と墓崇拜、ダルガーの発展と聚落成立との関連、スーフィー聖者の墓の形態と構造などの諸問題が幅広く扱われていて、本書の著者をもつ学問的視野の広さと、関心の多彩さを示しているのである。

さて、第四部の内容に接して強く感じられるのは、デリーの歴史地理についての著者の深い造詣である。これは、著者自身の長年にわたる遺跡調査と、これに関わる文献研究とによって得られたものであるが、この第四部では、とくに、第三章における、三つの聚落の成立と発展過程についての考察や、付章第一における、三大聖者の活動拠点のもつ政治的・社会的意味についての考察などにおいて、存分に発揮されている。

ところで、本書の中心テーマである宗教権威と支配権力と

の関係についての考察は、もっぱら、付章第一と付章第二でとり扱われている。その概要についてはすでに述べているので、ここでは繰返さないが、要するに、ダルガー内外の建造物や都城・宮廷建造物などを資料とすることによって、スーフィー聖者と支配権力とか、相互にどのような態度をとったかを明らかにしたものである。その結果は、ある部分では、文献による研究結果を裏付け、また、他の部分では、これを訂正するものとなったのである。即ち、付章第一および付章第二は、まさに、建造物を資料として、宗教権威と支配権力との関係を説明しようとする本書の目的に、もつとも合致する内容のものであるように思われる。にも拘らず本書では、これらはいずれも付章とされ、この第四部全体のなかでは、付随的なとり扱いを受けているようにみえる。

その理由は、多分、付章第一の、宗教者に対するスルターンの態度と諸施策の考察においては、サルタナット末期・ムガル時代が全く対象外とされ、付章第二では、もっぱらニザームディーン大聖のみが対象として扱われたことにあるのであろう。従って、今回ふれられることのなかった時代や聖者についても、今後、同様の考察がなされることを切に期待するものである。

さて、著者は、第四部第四章において、聖者の墓の形態と構造にふれ、聖者の墓が墓建築の形をとる場合、デリーでは

ほとんど列柱式の形式をもつとする事実を指摘され、これを前提に各種の考察を進めておられる。しかし、実際には、本書で聖者の墓とされた列柱式墓建築のほかにも、同形式の墓建築は多数デリーに現存しており、そのなかには、スルターンの墓であることのほぼ確かなもの（T・九二）や、聖者とは解釈できない人名を碑文に記すところのもの（T・一〇三）などが含まれている。聖者の墓にとって、列柱式建造物が、何ゆえにふさわしいものであったかについての本書の見解は、それ自体、十分説得的なものであるが、やはり、右のような事実をもふまえた考察も欲しかったように思う。

なお、列柱式墓建築の成立の時期について、著者は本書において、トゥグルク朝後期としておられる（五八六・五九二ページ）。しかし、これは、著者がすでに別論文（東大東洋文化研究所紀要第三十四分冊、昭和三十九年三月）で発表さ

れた、奴隸王朝中期の二人のスルターンの墓が列柱式墓建築であったであろうとする見解と明らかに相違する。評者は後者の見解に賛同するものである。

5

以上、本書の内容について、その概要を紹介し、かつ評者が感したことがらを若干述べてきた。本書は、本文六七二ページにおよぶ大著であり、内容はすこぶる豊富で、論点も多岐にわたる。従って、評者には、理解の行き届かぬところが多々あったし、ときには誤解に陥ったところがあったかもしれない。この点、御寛恕を乞う次第である。（一九八一年一月）

（東京大学東洋文化研究所、一九七七年九月、B5判、
XXXXIX+671+11+36ページ）